

おわりに

これまで『熊谷家伝記』を前提にして、天竜川の淵にまつわる伝説を見てきた。それではこの淵という場所ほどのような特徴があるのであろうか。これまで見てきたことをまとめると次のようになる(数字は前章での伝説の番号)。

(一) 死者の霊が留まる

第一章の右衛門三淵・ア・イ

第三章のア・オ

第四章の川死霊・ア・イ・ウ・エ・オ

第五章の五・七

(二) 竜宮からの使者

第二章の蓼汁と若者・ア・ウ・ケ

第五章の一②③・一一

(三) 竜神・大蛇

第二章のウ・オ・コ

第五章の一①・二・二二・二三・一四・一五・一六

(四) 河童の住む場所

第二章のウ・エ・オ・カ・キ①②・サ
第五章の九・一〇・一一

(五) 不思議なアメノウオ

第二章のイ

第五章の七・八

(六) 貸し椀伝説

第二章のウ・エ・カ・キ①②・ク・ケ・コ

第五章の三・五・一四

(七) 機織伝説

第三章の機織り淵・ア・イ・ウ・エ・オ

第四章のア・イ

第五章の一③

(八) 沈鐘伝説

第五章の一・四

(九) 雨乞信仰の場

第二章のキ

第五章の四・五

(一〇) その他

第五章の六・一七

右のうち、(二)(三)は竜神信仰に関係するものである。これは天竜川の源流である諏訪湖の諏訪明神が第五章一六

の伝説にも見られるように、竜神もしくは蛇体だとされる（註1）ことも関係する。諏訪湖から流れ出し、蛇行しながら下っていく天竜川は、天から流れるようにも理解され、水の神でもある竜と特に密接な関係を持つ川として理解されたであろう。

竜神信仰について亀山慶一は次のように説明している。

龍は古代中国における観念上の靈獣で、わが国の龍神信仰も中国の影響をうけていることは否めないが、その基体は水神の表徴である蛇信仰にあったと考えられる。民間では龍神・龍王・龍宮などの言葉がしばしば用いられるが、いずれも龍信仰と結合して発生したものであろう。龍神は古くから水田耕作を基本的な生業としたわが国では、その生産に不可欠な水を司る神として信仰され、農耕生産と結びついて民間に浸透した。雨乞いが龍神が棲むと考えられる淵もしくは池沼で行なわれるのは、全国的な慣習である。水神としての龍神は雷神信仰とも結びつき、龍神は、しばしば龍巻のときに天にのぼると考えられ、茨城県の北部では、水戸の雷神様から雨乞いの水をもらってくる。水田の農耕儀礼における蛇の登場は、わが国のみならず、ひろく東南アジアの各地に見られる。龍神は、一方漁業生

産とも深くかかわり、海を生産その他の活動の場とする人々の間では、龍神祭がひろく行なわれる。浦祭・磯祭・潮祭と呼ばれるものがそれで、この日沖止めをする慣行もひろい。海上生活者の間で、金物を海に落とすことを禁忌にしているのは、鉄を嫌う蛇信仰が龍神信仰の基底にあることを思わせる伝承として興味深い（註2）。

ここには、先に見た天竜川の伝説にかかわる多くのものを含み込まれている。そして、竜神という説明されているように雨の神としての性格が強いのである（註3）。

この竜神信仰と密接な関係を持つのが（八）の「沈鐘伝説」と（九）の「雨乞い信仰の場」である。このうち沈鐘伝説は、日本に広く分布しており、その多くは竜宮から鐘が来たことになっている。つまり、沈鐘は我々の住むこの世ではないあの世、他界・異界からやって来たたとされているのである。そしてこの鐘を用いた雨乞いも各地に見られる。この点については拙著『中世の音・近世の音』に詳述した（註4）。

この二つにおいても、明らかに淵は水神である竜神の住む竜宮などにつながっている。こうした竜宮に対する信仰については、田中磐が長野県などの事例を集めている。そ

の中には後述の機織り淵関係のものもある(註5)。

(四) に出てくる河童が伝えた葉の例も田中馨が紹介している(註6)。なお河童について、石川純一郎は「奥州旧南部藩や津軽一帯ではミズチ、メドチといい、水中の蛇と観ている。これは水霊のことで、(中略)蛇に似て四脚あり、竜に似て角なきものであった。竜はわが国のものではないから、ミズチはもつと蛇に近い。蛇は山の神・水の神の使われしめ、または土地の精霊である」(註7)などと説明している。水神信仰と河童の関係については竹田旦の論文があるが(註8)、この説明にも見られるように河童自体も水の神と考えられていたのである。

(九)(一〇)(一一)の伝説は河童駒引の伝説の典型である。柳田国男は河童駒引の伝説と、水辺に牝馬を放して竜ないし水神の胤を得るという思想と、天下の名馬が水中あるいは水辺から出現するという俗信とは同じ根から発しているとした(註9)。またこれを雨乞いなどにも触れながら世界的な視野の中で論じた本に、石田英一郎の名著『河童駒引考』(註10)がある。

(七)の「機織り伝説」も水にかかわる。この伝説が七夕に関係するものであることは、既に折口信夫が「七夕祭りの話」(註11)で考察している通りである。七夕には

「雨が三粒でも降ることになっていて、殊に七夕雨といって短冊が流れるほど降ると良いという所さえある。因幡八頭郡では一粒でも雨が降れば良いが降らぬと二つの星が会い、病の子が生れるから困るといい、常陸久慈郡でも降らぬと疫病神が生れるという。都会風の星の観念から言えば全く逆になっているが、雨が降った方が良いと言ひ伝えた村々は調べてみると驚くほど多い。また七夕に関連する昔話や伝説はかなりあるが、羽衣説話系統に属しつつも結末が水に流されたり、水中に没したりしているのが目だつのであり、タナバタが恐らく水の儀礼として農耕儀礼の主要な一節ではなかったかと思われてくる」(註12)と説明されるように、水と深い関係を持つ伝承がある。それゆえ機織り淵の伝説も水そのもの、降雨と深い関係にあるといえよう。

ということになると(五)の「不思議なアメノウオ」も水とりわけ降雨に関係するかもしれない。というのはこの魚は「雨魚」とも書かれるからである(註13)。またこの魚は別にアマゴとも言うが、これは雨子に通じる。(八)では(諏訪)明神が淵の主がアメマスで、諏訪明神(竜)とアメマスの関係を暗示している。このようにこの魚自体が雨にかかわる魚と考えられていた可能性がある。

何れにしる、このように淵は水の神の住むところとしての意識が大きい。これに(一)の「死者の霊が留まる」という概念も組み合わせると、淵がああ世への入口、もしくは淵そのものが異界としてとらえられていたことは疑いないであろう。

以上を通じて淵がああ世、別の世界とつながる場所として、つい近年まで意識されていたことが明らかである。

『熊谷家伝記』は、このような伝説を巧みに組み込んでできているのである。その意味でこの本の三巻以降であっても、本書で取り上げた以外に歴史的事実として評価できない部分が多々あり、この本の使用には慎重な態度が求められる。

千葉徳爾は二章で扱った『熊谷家伝記』の第三巻の夢を嫌う若者の部分について、『熊谷家伝記』が記している時代の坂部や、福島・市原などにはほとんど灌漑すべき水田がなかった。つまり水を制御支配する手段は極めて貧弱であり、僅少な水量だけが自由になったにすぎなかった。だから日照りのときの水の供給が最も天の恵みと考えられた。河童が農事の手伝いをしてくれると考えられたのはこのような環境においてであった、などと注目すべき指摘をしている(註14)。このように本書を、近世に存在した伝説の

世界として読み取れば、それはそれで新たな中世や近世の世界を我々の眼前に示してくれるものと思う。その意味で、今後『熊谷家伝記』は新たな活用のされ方が望まれるであろう。

それにしても、『熊谷家伝記』や伝説の中で、ああ世への入り口、異界のある場所として意識されていた天竜川の淵は大きく変貌した。両岸に強固なコンクリートの堤防が築かれ、川の周囲は人工の構築物で囲まれ、広い自然の河原が失われた。多くの場所に制水用のダム、発電用のダムが作られ、水が堰き止められたために、かつては天竜川の流れによって下流まで運ばれていた土砂が上流や中流でも淵を埋めた。以前は満々と水をたたえていたダムさえもが土砂に埋まりつつある。

淵の不可思議さ不気味さは、自然の中で何も手を加えられていない状態で、青々と水をたたえ、しかも底知れぬ深さがあったからだった。ダムの水はいくら深さがあってもあのような不気味さは感じられない。不思議な淵の喪失は治水という側面では間違ひなく大きな前進であった。しかし、そうした時代の進展のなかに、長い間人々が川の淵に抱いた気持が失われているのもまた事実なのである。近代

的な西洋の技術を導入しての堤防の構築、ダムなどの建設は、日本人を自然の水から遠ざけ、同時に洪水の被害からも遠ざけた。しかし、自然は本来に制御されたのか、また人間がかつて淵に抱いたような恐れを本来に抱かなくてもよいものなのか、そろそろ真剣に考えるべき時期に来ているのではないだろうか。

註

- 1 今井広亀「竜蛇信仰」(『諏訪大社』一六六頁・信濃毎日新聞社・一九八〇)、金井典美『諏訪信仰史』(名著出版・一九八二)
- 2 大塚民俗学会編『日本民俗事典』(弘文堂・一九七二)
- 3 高谷重夫「雨の神―信仰と伝説―」(岩崎美術社・一九八四)
- 4 拙著『中世の音・近世の音―鐘の音の結ぶ世界―』(名著出版・一九九〇)
- 5 田中馨「河童憑き」(『信濃』六卷一号・一九五四)
- 6 田中馨「山村の龍宮信仰」(『信濃』第七卷一・六・一一号・一九五五)
- 7 石川純一郎「河童」(『民間信仰辞典』八三頁・東京堂出版・一九八〇)
- 8 竹田旦「水神信仰と河童」(『民間伝承』第一三卷六号・一九四九、この論文は『河童』岩崎美術社・一九八八にも収録されている)
- 9 柳田国男「山島民譚集」(『定本柳田国男集』第二七卷四九頁・筑摩書房・一九七〇)
- 10 『石田英一郎全集』第五卷(筑摩書房・一九七〇)
- 11 『折口信夫全集』第一五卷一六九頁(中公文庫・一九七六)
- 12 『民俗学辞典』三五五頁(東京堂出版・一九五一)
- 13 『日本国語大辞典』第一卷四四二頁(小学館・一九七二)
- 14 千葉徳爾「田仕事と河童」(『信濃』第一〇卷一号・一九五八)